

# あびこの文化

発行人 大洋 美崎  
我孫子市 高野山  
250-23  
04(7182)  
0861

## 文化講演会&総会

この2年間コロナ禍により会員が一堂に会しての総会を開催することはできませんでした。最近、大都市圏の感染者数が減少傾向にはありますが、まだまだ油断は禁物です。一方でお互いの元気な姿を確認したいという一部の会員からの要望もあります。

就きましては、以下の予定で総会を開催します。総会に先立ち文化講演会を実施します。皆様の参加をお待ちしますが、感染予防対策についてもお忘れなく。

日時 6月5日(日)14時〜文化講演会

16時〜総会

場所 あびこ市民プラザホール

### 文化講演会

#### 「村川別荘と我孫子 嘉納治五郎との絆をたどって」

講師 村川夏子氏(村川堅固の孫、堅太郎の長女)

講演概要「村川堅固が熊本第五高等学校に在学中、嘉納治五郎が校長として赴任されました。帝大生になった堅固は嘉納治五郎主宰の雑誌『國土』の編集者として補佐に当たり、嘉納の励ましを得て大学院進学を固めました。

『國土』は一旦休刊した後、大正4年に『柔道』と改題して再刊され、その後も改題を重ねて続きました。その間、嘉納は講道館文化会を興し、堅固はその主事となり、嘉納の雑誌にたびたび寄稿し、持論「住食衣主義を提唱す」や朝鮮渡航報告などを残しました。

その傍ら、嘉納の誘いで大正半ばに我孫子に別荘を設け、昭和初年には共に手賀沼の保勝に努めました。

村川別荘母屋の竣工から百年を記し、幻のオリンピックにも触れつつ両名の絆を辿り、両名亡き戦後の出来事も振り返ります。」

### 連載①

#### 稲村雑談寄稿―我孫子の文化を守る会へ―

我孫子市白樺文学館 学芸員 稲村 隆

はじめに

先日、辻館長より我孫子の文化を守る会的美崎会長から原稿依頼があり書くようにと話があった。ちょうど所用で教育委員会に顔を出し、美崎会長と辻館長が電話をしているところで、偶然にもそれは私の誕生日だった。

約半月ほどたつて、美崎会長から電話にて正式依頼があった。「高尚なものはこちらと…」というお言葉に、「小難しいことは嫌いですから」と返事をした。

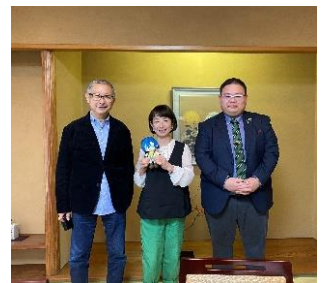
タイトルにした「稲村雑談」は志賀直哉(1888-1971)が熱海在任期(1948.1-1955.5)に広津和郎らと雑談した速記をもとにしたものである。生まれてから雑談が行われた1948(昭和23)年までの人生を振り返り、「祖父」「尾ノ道」「我孫子」など18項目から構成されている。冒頭、志賀は次のように述べている。

「このとりとめのない雑談は昭和二十三年五月十四日と、その後も一度、熱海稲村の今私が住んである家で、話の引き出し役をしてくれた広津和郎君その他二人を相手に話した私の雑談の速記で、或る所は更に書き加へ、又、前に一度書いた事、或るひは余り面白くない所は除いたりしたものである。気軽に読流して貰へれば幸である。」

〔稲村雑談〕『志賀直哉全集』第8巻1999年、岩波書店149頁

私が白樺文学館に勤務する前、大学卒業間近の2月だったろうか、文学館を初めて訪問した。竹下賢治学芸員(当時)に名前を告げると「稲村雑談だな」と言われたことを思い出す。元来、文学に興味の薄かった自分には正直、そのころは何を言っているのか分からず、笑うだけであった。まさか後にその作品の名前と自分の名前をかけて、トークのイベントになるとは当時はずいぶんとも思わなかった。そしてコロナ禍となり、稲

村雑談はYouTubeへ進出し、山田裕氏(志賀直哉御令孫)、阿川佐和子氏(阿川弘之御令嬢)という大物ゲストを迎えたトーク番組と成長している。詳しくは「稲村雑談」YouTubeで検索していただきたい。(画像①阿川佐和子さん、山田裕さんと筆者、2021年秋、銀座浜作本店にて)



(1)別荘地・我孫子―嘉納治五郎から柳宗悦へ―

1896(明治29)年、常磐線我孫子駅が開業、柳宗悦曰く「我孫子への汽車は上野を発して一時間と十五分で来る。直通の列車は僅か四十分を出ない」(柳宗悦「我孫子から通信第二」『柳宗悦全集』第1巻、筑摩書房、1981年342頁)というアクセスにより、多くの文化人、財界人が手賀沼のほとり、高台から望む風光明媚な景観を求めて別荘を築き始める。「別荘地・我孫子」という時代といえるだろう。島田久兵衛、杉村楚人冠、村川堅固、そして嘉納治五郎である。杉村によれば「嘉納さんが我孫子に見えられた時は、講道館の総大将でもなく、大教育家でもなく、貴族院議員でもなく、実にものをやさしい一個の好々爺であった」(杉村楚人冠「嘉納先生」『楚人冠全集』第16巻、日本評論社、1939年106頁)という。

嘉納が我孫子に來なければ、白樺文学館は設立されなかっただろう。柳を我孫子に導いたのは、嘉納だった。嘉納の姉の子どもが柳であり、元々柳の母と姉が互いに連れ合いを亡くし隠居暮らしをするのに、嘉納を頼ったというのがはじまりである。結局柳の姉が再び嫁ぐことになり、母一人で住むには不便だということで、当時新婚だった柳夫妻が別荘番代わりに住んだ

というのが事(我孫子白樺物語?)の始まりである。

1920年代になると、食糧増産の兼ね合いもあり、新田開発、手賀沼干拓の話が持ち上がってくる。我孫子の別荘人たちにとって、手賀沼の景観、環境は非常に重要であり、手賀沼の魅力を残すため、彼らは手賀沼保勝会を結成、その保存に努めた。当時は旅行ブーム・景勝地ブームが起きており、都内から日帰りで行ける風光明媚な土地の一つが我孫子であった。

嘉納ら別荘人たち、いわゆる戦前の知識人というのは、自分の別荘地である我孫子の振興に努めた篤志家のようなものだと思う。幕末・明治生まれの人たちには、自分を育ててくれた郷土、社会に自分の力を還元して、こうという意識が強く、芸術や文化のために投資するという動きが盛んだった。白樺文学館を建てた佐野力氏も、そういった意識があつたのだろうと推測する。

白樺文学館は、佐野氏によって、白樺派文人たちの活動を広く次代に伝えるため、いわゆる「メセナ」として建設された。開館にあたっては基本構想、資料収集などは、武田康弘館長(当時)を中心に行われ、2001年一般公開が始まった。

当初は「志賀直哉文学館」とする計画だったようだが、志賀直哉の遺族から、遺言で名前を冠した記念館等は作らないでほしい旨の連絡があり、それでは白樺派である柳宗悦、武者小路実篤もゆかりの地であることから、「白樺文学館」という名称になったようである。

私営時代には、白樺派、民藝運動について、展示だけでなく、阿川弘之氏をはじめとする著名作家、白樺派、民藝運動の研究者のほか、郷土史家・陶芸家・音楽家など多岐にわたる講師を招き、月例の講演会および研修会(面白白樺倶楽部ほか)を延べ80回以上開催している。2009年からは「我孫子市白樺文学館」として我孫子市に運営が移管され、現在に至る。

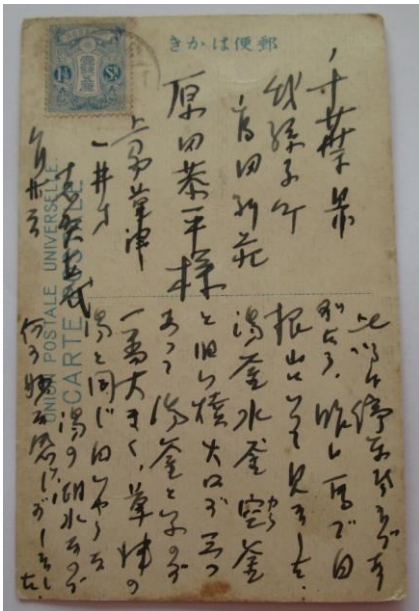
しかし白樺派のゆかりの地の一つであり、生誕の地や亡くなった地ではないことから、なかなか資料(特に我孫子時代の資料)が乏しいという状況もあつたので

はないかと推測する。私自身着任以来、所蔵コレクションだけでは展示の質で魅せていくというのは、難しいと感じた。理解のある博物館、美術館、コレクター、関係者の協力を得て、各種展覧会を企画してきたが、やはり小規模館の限界を痛感する。だからこそそれを逆手にとつて、白樺派や民藝運動などの「入口に立つ館」として、イベントに力を入れるようになった。

白樺派や民藝運動に関する作品の朗読会、2014年春に日本民藝館から寄贈された柳兼子愛用のピアノを利用した館内のBGM演奏の開催、そして朗読、ピアノのコーポレーションによる「白樺の調べ」に発展、展示解説、ギャラリートークとしての稲村雑談も毎月開催へとこぎつけた。なかなか志賀直哉の小説を読んでもみようとさえ思えなくても、朗読で耳から入つてもらおう、またピアノの演奏に興味を持った方が、度々来館しているうちに、白樺派や民藝運動に興味を持っていくという姿を老若男女問わず見かけるようになった。

2020年には、『白樺』創刊110年を記念して、『白樺楽藝団』旗揚げ公演として、朗読、ピアノ市民スタッフによる発表会を計画していたが、コロナによりその夢は止まった。

市民スタッフの方々にはまさに白樺派に魅せられ、今日の「我孫子・白樺派」(次回以降詳述)を支える人々と私は思っている。我孫子市教育委員会、生涯学習部が所管する施設として生涯学習、社会教育という観点から、市民の活躍の場、そして市民に愛される文学館であるように努めている。



別荘関係で、もうひとつだけ思い出したことを書き記しておく。別荘を築いた人の中で最も早いといわれるのが、日本橋で薬種問屋を営んでいたといわれる島田久兵衛である。名前の略称からその別荘は、島久別荘と呼ばれていたようで、それは画家、歌人であった原田京平(恭平・聚文・和周)宛の志賀直哉書簡からわかる。(画像②資料番号349「原田京平宛志賀直哉書簡」絵葉書1922(大正11)年8月22日付。(我孫子市白樺文学館蔵)当時志賀は、草津に坐骨神経痛療養のため出かけていた。以下参考、志賀直哉「草津温泉」『志賀直哉全集』第9巻、岩波書店、1999年)

原田は我孫子移住初期、島久別荘に滞在していたようだが、滞在していたという事実のみで詳細は不明である。手賀沼北岸地域、ハケの道沿いの別荘群の様子は、村川別荘関係で絵葉書や写真などから少しわかる程度で、別荘群全体の雰囲気や、松林など植生の様子などは新潮文学アルバムなどでわかるものもあるが、白樺文学館はじめ我孫子で所蔵しているものは極めて少なかった。そのため原田京平関係資料は、志賀直哉たち白樺派が暮らした当時の我孫子の様子をビジュアル的に、色彩豊かに伝えてくれる貴重な資料なのである。原田京平関係資料を見ていると、もしかしたら京平が描いた別荘の様子を描いた油彩画ではないか?と思いたくなるようなものも散見される。断定的なことは言えないが、朝鮮半島や台湾を旅行した際に描いた作品ではないかというのが正直なところだ。彼は我孫子を出てから同地で展覧会などを開催していることはわかっている。

(画像③資料番号24原田京平「画題不明(植物園1)」、画像④資料番号25原田京平「画題不明(植物園2)」我孫子市白樺文学館蔵、いずれも原田聚文銘であり、我孫子時代後期から世田谷時代と思われるが、ちよつどその頃朝鮮や台湾などを訪問している。)京平の作品は、修復が必要なものがほとんどであり、展示を行うまでには時間と費用を要する。着任以来少しずつ修復が進み、ようやくその作品を発信することができ、近年各種メディアに取り上げられはじめ

ている。昨年は読売新聞日曜版(全国版)に彼が描いた我孫子の風景画が大きく掲載され、全国より反響の声をいただいた。また出身地である静岡県浜松市の浜松文芸館にて、昨年から今年の2月にかけて原田京平展を開催することができた。

現在原田京平の資料について所蔵しているのは管見の限り白樺文学館だけであり、原田京平関係資料約500点のうち90点近くを貸出することができた。文学館に勤務していると、資料に関するさまざまな情報が耳に入ってくる。しかし残念ながら資料の発掘まで至るケースはごくわずかである。ではそもそも京平の資料がどうして文学館に舞い込んだのだろうか。

原田京平という存在は、私営時代、白樺文学館のボランティアスタッフであった矢野正男、平林清江両氏によつて発掘、調査されたのが端緒である。その後私が着任してから本格的に研究を引き継ぎ、今日文学館では、原田を志賀たち白樺派が創造した文化空間「我孫子・白樺派」を継ぐ者として、位置づけ、調査、研究



検証(顕彰)している。原田たち画家の話、「我孫子・白樺派」はまた改めて掘り下げるが、ともかく別荘地としての我孫子という時代、空間が近代我孫子の土台であったことは間違いないだろう。

話の続きが気になつて仕方ない方は、YouTubeやweb上で「白樺文学館」を検索してほしい。今や情報が入ってくるのを待つ時代ではない。情報を如何に集めてその真偽の程度を見極め、自らの知見とするために「メディア・リテラシー」が問われる時代である。柳の民藝に引き付けて考えるならば物事を見定める「眼」を養う必要があるといえるのだろう。ジブリ映画「もののけ姫」で言うならばアシタカのセリフである。「曇り無き眼で見定める」ということだろう。読者の「メディア・リテラシー」、「眼」を信したい。

続く。

手賀沼周辺の風景を鮮明に描き、「我孫子・白樺派」の精神を今に伝える画家・原田京平とは  
<https://chiconi.com/press/1761110/>

放談くわん 講演報告

『我孫子宿 水戸道・成田道「追分道標」の保存活動について』

牧田 宏恭 (公員)

4月24日(日)「あびこ市民プラザ」会議室において、表題の講演会が開催された。

2年余り前から続く「新型コロナ禍」も、幾分収まりを見せたかに思えたが、今度は「新オミクロン株の変異型」による感染が心配の度を高め3回目どころか4回目のワクチン接種の開始まで取り上げられる昨今ではあるが、感染症対策を取りながら、講演会開催となった。

講師は、「我孫子市史研究センター」の会長を務め



られた、「関口一郎氏」である(写真1)。

今回の内容は、歴史好きの市民が、住まいの近くで管理が放置されていた、「気になつてきた史跡ともいえる歴史のある場所」について、「あること」がきっかけで行動を起こした過程のお話の紹介である。

講演者の関口氏は、お住まい近くの我孫子市寿に位置する、この史跡の保存活動に関わる市民の中心メンバーの一人である。

さて、「追分」とは？「追分道標」とは？全国各地に古くから「街道」「道中」「往還」などと呼ばれる「道」があつて、それから二股に分かれる道や、あるいはそれに交わる道があり、三叉路を形成しているところが「追分」と名付けられ、地名にも成っているところがある。「追分道標」はそこに存在する「道路標識」のことと私は認識している。関口氏によれば、今回取り上げた場所は「我孫子市の追分」との市の認識と違って差し支えなさそうだとその事。市の広報(1986年発行)にも「道標」が取り上げられるなど関心がもたれている。

「道標」は、街道の標識として、各所に存在する「一里塚」とともに大切な「道しるべ」であった。

講演配布資料は写真に見られる4点で、貴重な写真も含まれている(写真2)。以下に講演内容を順追つて記す。

1. 序：江戸時代の街道についての説明

①五街道(道中奉行の管轄)——起点は日本橋

：東海道：品川經由京都三条大橋まで、寛永元年(1624)徳川家光時代に完成

：日光街道：千住—宇都宮—今市—日光まで、寛永十二年(1636)家光時代に完成

：奥州街道：日光街道・宇都宮—陸奥白川まで、正保三年(1646)家光時代に完成



・中山道：高崎―下諏訪―木曾(妻籠)―草津―大津  
 一京都まで、元禄七年(1694)綱吉時代に完成  
 ・甲州街道：内藤新宿―八王子―甲府―下諏訪(中山道に合流)、明和九年(1772)家治時代に完成  
 ②脇街道：脇往還(勘定奉行の管轄)

・水戸道中(水戸道)：千住―新宿(にいしゆく)―松戸―小金―我孫子―取手―藤代―若柴(竜ヶ崎)―牛久―荒川沖―中村―中貫―稲吉―府中(石岡)―竹原(小美玉)―片倉―小幡―長岡(茨城)―水戸までの19宿―(松戸までは五街道に準じ)道中奉行の管轄)

水戸以北は岩城街道、磐城街道、磐城相馬街道、岩沼宿で奥州街道に合流。  
 明治初期以降から陸前浜街道と呼ばれる。

③その他  
 ・街道に関連して、関所・一里塚・並木・海道がある  
 我孫子市内の一里塚：根戸―東我孫子―湖北―布佐が存在する、または「ん跡?」がある。

2. 本題：我孫子宿東端の追分、水戸道・成田道の分岐点の保全

過程①：我孫子第一小学校入り口の信号機(寿1)付近は江戸時代の水戸道と成田道の分岐点(追分)で、中世・戦国時代からあつたと推定され、貴重な歴史遺産の場所である(図1)。

また、この地は以前から「手を加えたりすると(祟り)がある」と言い伝えられていたようで、ずっと手付かずのまま放置されていたようだ。私は、この地点を通るたびに、嘗て大きな桜の木が、堂々とした姿で存在していたことを思い出す。



す。  
 平成二十六年(2014)7月には資料によると写真の状態になった様だ(写真3)。

ところが「あること」が令和元年(2019)12月に突然起きた。それは、「この追分」にあったランドマーク的存在の桜など3本の樹木の伐採であった。風景は一変、ガードレールに囲まれたこの三角地点に倒れていたり、半分地中に埋まったままの道標や、本来から違う方向を向いた道標など様々な状態で放置されて現れた写真4、5)。伐採は、交通安全確保の理由によるもので、所管する県により行われたことも判明。

過程②：この歴史遺産文化財を整備・保存すべきではないかと、5つの地元自治会(子の神台、寿町などの5つ)、商店会が中心となって我孫子宿の「水戸道・成田道追分保存発起人会(渡辺会長・寿商店会会長)を立ち上げた。道標の復元工事費用は県・我



孫子市と協議し、県・市の理解は得られたものの、実施は保存会の募金活動を以て賄うことになった(2021年4月開始)。寿商店会のほか他の自治会、諸団体の有志の協力も得、必要金額の寄付が集まった。なお、併せて費用の確保のため、「この地：道標設置場所」を取り巻く地域の姿を説明した立派な資料も作成されている(安斎秀夫氏写真をもとに)。また、この活動に入るきっかけを、関口氏は、市史研が発行した「我孫子の字誌」作成に際し、地名の「名付け」の「いわれ」を調べていくうちに、

我孫子は歴史資料を大切にしていない、このままではダメだ。と痛感したことが背景にあると説明された。

過程③：令和三年12月の地鎮祭、翌本年1月の道標一時仮移設写真6)、道標の調査・破損部分修理、併せて「追分」の地点の土地ならし等を実施し、道標の配置は年代順に並べるようになった(写真7)、(写真8)(年代不詳は2基あり)。なお、地鎮祭を取材した報道機関の取り上げも、この活動の一助となった事もあったようだ。



①

3, 事業推進と今後の課題  
道標の風化(伝承による放置の恐れ)対策

追分道標の「説明盤」は、本年度の我孫子市教育委員会の事業として設置が予定されているとのこと。



最も古い道標は、今から330年前の元禄四年(1691)の庚申道標、寄進者の名前が列記されていて、利根川の流路変更(付け替え)から余り時を経ない時期に立てられた道標と判定され、貴重な歴史資料である。また、文化十三年(1816)の「成田山」不動道標は、中心的位置付けとして年代も3番目に位置した。この道標の三面には「東、西、北」の方角が記され、夫々に相当する地名が道法(みちのり)と共に、計22か所表示されている貴重な文化財とのことである。



④ ③ ②

国推進の市町村「文化財保存活用地域計画」に関連し「我孫子市文化財保存活用地域計画協議会」設立  
我孫子市拠点施設建設構想「推進」と「郷土資料センター」等施設実現への関連団体の活動  
文化財保護・活用への自治会の関心と活用  
これら一貫した取り組みが重要である。

(おわりに)

この活動を通じ、地元の前向きな取り組みが保存事業の成功を成しえたこと、協同して地元の歴史を大切にすきつかけ作りとなったと認識した次第である。なお、会の冒頭、司会者から「この問題は、木の伐採をせずに、うまく保存させる方法についての選択肢も考えるべきではなかったかと悔やまれる」との発言があったことを加える。

(注:写真2〜8)は関口氏のパワーポイント資料撮影を撮影、図1は「広報あびこ」1547号「記事(配布資料)」の部分コピー撮影した分の記載である。

講演を聴いて

今回の「放談くらぶ」は我孫子市史研究センター前会長の関口一郎氏に「我孫子宿 水戸道・成田道」追分道標」の保存活動について」のテーマで講演頂いた。

当会では今年の1月会報に「江戸時代の道標を保存」の見出しで、関口氏を中心とする地元自治会や商店会の当該保存活動の記事を掲載したことがあり、逸早くこの活動について講演依頼をお願いしていた。関口氏は肩書にあるとおり数年前まで市史研(我孫子市史研究センター)の会長を務めており、本家の市史研でもこのテーマでの講演会を実施したことがなく、関口氏自身、やりにくかろうと思っただけから、事前に市史研の岡本現会長の了解も得て実施に漕ぎつけた。今回の保存活動で結果的に道標が整備されたが、元はと言えば「木が邪魔をして信号が見えない」という我孫子市民から市への一本の電話が始まりである。近隣の住民はある日突然、3本の樹木が伐採され周

りの風景が変わってしまったことに驚きや怒りや困惑があったと推察される。詳しい説明もなく(というよりはむしろ事前の説明は近隣から反対があると聞いたのだろう)、怒りの持っていくどころがなかったろう。しかし前向きに「水戸道・成田道追分保存発起人会(渡辺一彦会長)を立ち上げた。

この場所は昔から「手を加えようと祟りがある」といういわく付きの場所だったという。実際に今回、いくつもの業者が「祟りを恐れて」伐採作業を断つたらしい。仮に「樹木が邪魔して信号が見えない」という一本の電話がなかったら、今回の道標の整備と加えて新たな道標の発見はなかったろうし今もって道標が散らばった状態のままだったかも知れない。そういう意味で結果から見ると良くも悪くも「瓢箪から駒」と言えるのではない。

詳しく伺ったところ、実は、この「分岐点」及び「道標」については以前から「何とかしなければ」と関口氏と渡辺氏との間で話をしていたらしい。丁度樹木伐採の前後に我孫子市から公開された「我孫子市未指定文化財の「調査中」項目候補リスト」に、当該「道標」が調査対象になつていなかったことから、パブリックコメント(意見公募)に対する意見として、分岐点と道標の歴史の意義を記し、資料を添付して市に送付した。その際「重要な我孫子遺産として認識はしているが、所有者不明で、研究・調査の対象にしていない」と市から返答があったとのこと。こうした行政との遣り取りがあったことが当該箇所の「整備・保存」の早い取り組みと対応に繋がったのでは、と関口氏は語った。

我孫子市では現在「我孫子市文化財保存地域計画協議会」を組織し市内の文化財の保存に取り組んでいる。この計画の中には従来の文化財の保存ばかりではなく市内の埋もれた文化財の発掘、発見も含まれる筈である。今回の道標の整備活動は我孫子市民が周りの文化財に関心をもち理解し保存活動に協力するだけではなく、「身の回りに隠れた文化財が無いか」について関心と意識を持つ必要があることを教えてくれた。(美崎記)

## 江戸六地藏と代仏地藏の見廻り

佐々木 侑

本件は、昨年9月25日(土曜)に江戸六地藏の内、三地藏を見廻りしたのち、11月27日(土曜)残りの三地藏(永代寺の地藏はなく、その代仏地藏の見廻り)をした報告である。

江戸六地藏の由来は、江戸に繋がる六街道に地藏菩薩を安置し旅人の無事を願ったのが起源とされる。宝永3年(1706)、江戸深川に住む地藏坊正元が発願して、江戸の主要六街道の出入口に地藏菩薩坐像を安置した。京都六地藏に倣い、江戸六地藏の設置を発願したのである。正元は、江戸市中から多くの寄進者を募り、旅の安全と病苦平癒を祈願して、巨大な青銅佛を、宝永5年(1708)〜享保5年(1720)の12年間で成し遂げた。7万2千名を越える寄進者名は、台座や蓮華などに刻まれている。

六地藏巡りは、江戸時代から庶民の願いに耳を傾けてきたという、巨大な2,700前後お地藏様六体の像を巡って、旅の無事以外にも長寿や開運などのご利益に授かりたいとの信仰によるものである。

- 1番 真言宗 品川寺(品川区南品川3) 宝永5年(1708)建立 東海道に鎮座する筈のない地藏
- 2番 曹洞宗 東禅寺(台東区東浅草2) 宝永7年(1710)建立 奥州道に鎮座する平たい筈の地藏
- 3番 浄土宗 太宗寺(新宿区新宿2) 正徳2年(1712)建立 甲州道に鎮座する小ぶりの筈をのせた地藏
- 4番 真言宗 眞性寺(豊島区巢鴨3) 正徳4年(1714)建立 中山道に鎮座する大きな筈の地藏
- 5番 浄土宗 靈巖寺(江東区白河1) 享保2年(1717)建立 水戸道に鎮座する斜めに筈をかぶる地藏
- 6番 真言宗 永代寺(江東区富岡1) 享保5年(1730)建立 千葉道に鎮座していた幻の地藏(廃物)
- (番外) 天台宗 浄名院(台東区上野桜木2) 明治39年(1906)建立 ユニークな筈をかぶった代仏の地藏

行程: 9月25日は「品川寺」→「太宗寺」→「眞性寺」の各地蔵尊。

我孫子↓品川駅↓京急品川↓青物横丁駅↓品川寺↓旧東海道品川宿↓荏原神社↓品川富士登山↓品川神社↓新馬場駅↓品川駅↓新宿駅↓地下鉄御苑駅↓太宗寺↓新宿駅↓巢鴨駅↓眞性寺↓「とげぬき地藏・高岩寺」↓巢鴨駅終了

行程: 11月27日は「東禅寺」→「6永代寺跡」→「5靈巖寺」→「番外浄名院」の各地蔵尊。

我孫子↓南千住駅↓吉野通り↓東禅寺↓日本堤↓(銀座線)浅草↓日本橋(東西線乗換)↓門前仲町↓「永代寺」跡↓「深川不動尊」↓富岡八幡宮↓「靈巖寺」↓深川めしみやこ↓大江戸線森下駅↓御徒町駅↓鶯谷駅↓「浄名院」↓千代田線根津駅終了

### (1) 1番地藏: 品川寺(ほんせんじ)の概要



真言宗醍醐派の品川寺は、海照山普門院品川寺と号し、真言宗醍醐派の別格本山。品川寺の創建年代は不詳であるが大同年間(806〜810年)、開山は弘法大師空海と伝わる。江戸三十三観音霊場31番霊場、東海三十三観音霊場21番札所、東海七福神(毘沙門天)である。山門前に、江戸六地藏の一つ(東海道)が安置されている。

山号: 海照山 院寺号: 普門院品川寺 宗派: 真言宗醍醐派 本尊: 観世音菩薩(水月観音・聖観音)

参考: 大梵鐘(国指定重要美術品): 明暦3年(1657年)9月18日、京都三条大西五郎左衛門に命じ鑄造。周囲に徳川三將軍の号(東照宮、台徳院殿、台獻院殿)と六観音(聖・千手・十一面・准胝・如意輪・馬頭)

を陽刻し、普門品一巻を陰刻する。この大梵鐘は「洋行帰りの鐘」と呼ばれ、慶応3年(1827)パリ万国博覧会出品後に行方不明となったが、スイス・ジュネーヴで発見され、60年を経て昭和5年(1930)に里帰りをした。

### (2) 3番地藏: 太宗寺の概要

浄土宗寺院の太宗寺は、1588年頃(慶長年間)甲州街道の道筋に「太宗」と称する僧の庵として造られた太宗庵を始まりとする。徳川家重臣・内藤正勝の信望を得て、寄進を受け太宗寺と改称した。江戸六地藏の第3番地藏(甲州道)。江戸三閻魔の閻魔王像、奪衣婆像が安置されており、江戸時代から庶民に信仰されてきた。他に新宿山ノ手七福神の一つである布袋尊像、真つ白に塩を被った姿が特徴の「塩かけ地藏」などがある。



山号: 霞関山 院寺号: 本覚院太宗寺 宗派: 浄土宗 本尊: 阿弥陀如来 創建: 寛文8年(1668年)

### (3) 4番地藏: 眞性寺の概要

真言宗豊山派寺院の眞性寺は、医王山東光院と号す。眞性寺は、聖武天皇の勅願により行基菩薩が創建したと伝えられる古刹である。境内に安置されている地藏尊は江戸六



古刹である。境内に安置されている地藏尊は江戸六

地蔵の第4番地蔵(中山道)。また江戸幕府の代將軍徳川吉宗もたびたびこの寺に立ち寄ったとされる。御府内八十八ヶ所霊場、豊島八十八ヶ所霊場、3番札所。

山号:医王山 院寺号:東光院眞性寺 宗派:眞言宗 豊山派 本尊:薬師如来(秘仏) 開基:仁行基菩薩 創建:不詳

(4) 2番地蔵:東禅寺の概要



曹洞宗寺院の東禅寺は、洞雲山と号す。東禅寺は、哲州和尚が開山、格州和尚が開基となり、寛永元年(1624)に創建した。正面には江戸六地蔵の第2番地蔵(奥州道)が鎮座している。地蔵の左隣には、あんげを考案した銀座木村屋総本店の創始者・木村安兵衛と妻の夫婦胸像がある。

(5) 5番地蔵:霊巖寺の概要



浄土宗寺院の道本山東海院霊巖寺は、寛永元年(1624)霊巖雄誉上人が隅田川河口を埋め立てて霊巖島を築いた時の草創。明暦の大火(1657)後に現在地へ移転した。江戸六地蔵の第五番(水戸道)。

霊巖寺には、11代將軍徳川家斉のもとで老中首座として寛政の改革を行った松平定信の墓をはじめ、今治

藩主松平家や膳所藩主本多家など大名の墓が多く存在する。白河藩松平定信の墓所がある由縁でこの地には白河の地名が名付られている。関東十八檀林の一つ。

山号:道本山 院寺号:東海院霊巖寺 宗派:浄土宗 本尊:阿弥陀如来 開基:雄誉霊巖

(6) 6番地蔵:廃寺永代寺の概要

高野山眞言宗寺院の永代寺は、大栄山金剛神院と号す。永代寺は寛永元年(1624)長盛の開山により永代島に創建、江戸時代には富岡八幡宮の別当寺、江戸六地蔵の一つで第6番目(千葉道)として栄えたが、明治初年の神仏分離により廃寺となった。廃寺となった当時の永代寺境内跡地に記念の石碑が建てられているが地蔵は撤去されている。

第9番の眞言宗「永代寺」の地蔵菩薩坐像は、享保5年(1720)千葉道に面した江東区富岡一丁目に建立された。永代寺は、慶応4年(1868)3月13日の神仏習合を廃する神仏分離令による廃仏希釈で廃寺になり取り壊された。



廃仏希釈(はいぶつきしゃく)とは、仏教寺院・仏像・経巻を破壊し、僧尼など出家者や寺院が受けていた特権を廃することである。廃仏は、仏を廃破壊し、希釈は、釈迦の教えを壊(毀)すること。当時の政府神祇官や国学者は、仏教を外來宗教と忌み、寺院など財産や地位を剥奪、僧侶の下に属する神官達が寺院を破壊して土地を奪う。さらに僧侶の神職の転向禁止、仏像

仏具、經典の破壊を行なった。

明治新政府は、日本古来の神道を国家統合の基幹に据える画策をした。だが、葬儀など仏事の必要があり、明治4年(1871)に廃仏希釈運動は終息を迎えた。

\*現在の永代寺は、明治29年に旧永代寺の塔頭の吉祥院が名称を引き継ぎ、再興された。御府内八十八ヶ所霊場六十八番札所。

山号:大栄山 院寺号:金剛神院永代寺 宗派:高野山眞言宗 本尊:歓喜天

(7) (番外)代仏地蔵のある浄名院の概要

天台宗寺院の浄名院は、寛永寺36坊の一つとして圭海大僧都が開基となり寛文6年(1666)創建、享保



8年(1823)に寺号を浄円院から浄名院へ改めた。境内には8万4千体の石地藏尊が安置され、また明治初年に

神仏分離により廃寺となった永代寺の代仏とされる江戸六地蔵6番がある。江東区富岡(千葉道)の富岡八幡宮永代寺にあつた第



6番の地蔵が明治維新時に失われたため、日清日露戦争の戦役者慰霊のためとして明治39年(1906年)に浄名院に復活した。

山号・東叡山 院号・浄名院 宗派・天台宗 本尊：阿弥陀如来 創建・寛文6年(1666年) 開山：圭海大僧都 別称・ちま寺

## 「民藝」と式場隆三郎

### 『図録 脳室反射鏡』の紹介を兼ねて

美崎 大洋

令和3年10月26日から令和4年2月13日まで東京国立近代美術館で「柳宗悦没後60年記念展 民藝の100年」が開催された。柳宗悦が亡くなったのは1961年だから2021年は没後60年になる。また今年の3月1日から我孫子の白樺文学館で「民藝運動と我孫子」が開催されている。展示についての説明は以下のように書かれている。

「民藝」への歩みは、我孫子で始まったといっても過言ではありません。柳が我孫子に移住したのは、1914(大正3)年9月。我孫子では、「民藝」へと続く出会いと絆を育んでいます。(後略)

そもそも「民藝」という言葉は、「民衆的工芸」の略語で、民藝品とは「一般の民衆が日々の生活に必要とする品」という意味である。「民衆の、民衆による、民衆のための工芸」とでも言える。「民藝の100年記念展」の挨拶文は以下のように書かれている。

「民藝」とは、1925年に柳宗悦(1889-1961)、濱田庄司(1894-1978)、河井寛次郎(1890-1966)によって作られた新しい美の概念で、「民衆的工芸」を略した言葉です。彼らは、一般の民衆が使う日常の生活道具の中に、「美術」とは異なる手仕事の美しさを発見し、それを通して生活や社会を豊かなものに作り変えていこうとしました。民藝の思想は全国各地の賛同者、支援者をつなぎ、大きな文化的な運動に発展していきました。それから約100年が経過した現在においてもなお、民藝は色あせることなく、生活

の形を見つめなおそうとする人々に様々なアイディアを与え続けています。」

柳は、何も美しいものはすべて民藝品であるとか、民藝品でなければ美しくないと語っているのではない。ただ、自由で健康な美が、最も豊かに民藝品に表れているという事実を見定め、そういった美しさこそ美の本流ではないのかということ、人々に知らせようとしたのである。そして、民衆の暮らしから生まれた手仕事の文化を正しく守り育てることが、我々の生活をより豊かにするのだと主張したかったのである。

先の「民藝の100年記念展」では民藝関連の人物として柳宗悦、バーナード・リーチ、河井寛次郎、濱田庄司、芹沢銈介、式場隆三郎などの名前が並んでいたが、私は特に式場隆三郎に注目した。同展の会場の一角では1939年に作られた文化映画「琉球の民藝」が上映(30分)されており、この映画の監修に柳宗悦と同列に式場隆三郎の名前が記されていた。民藝に関しては柳も式場も遜色ないと言えるのではないか。

「民藝と言えは柳」という一般感覚・一般評価に逆らう私のへそ曲がり感覚もその理由だ。

改めて式場隆三郎の経歴について述べるが、以下の内容の殆どは『図録 脳室反射鏡』の引用と言うよりは転載である。『図録 脳室反射鏡』の説明については以下のとおり。



「種々雑多な資料・情報の集積を整理し、かつ整理し過ぎずに、複雑多様な集合としてお伝えすることを目指しました。一瞬手を触れるのをためらってしまふような、過剰なほどの存在感、式場隆三郎というカオスをめぐる、カオスな一冊です。」

### 〔収録内容〕

・図版・解説(全19セクション、図版約350点、解説約75,000字)

約75,000字)

・論考(全5篇)

・式場隆三郎年譜

・式場隆三郎著作目録(一九一四〜一九六五)

・式場隆三郎記事一覧(稿)

式場隆三郎は、1898年7月2日、新潟県中蒲原郡五泉町(現五泉市)に生まれた。1921年に新潟医学専門学校(現在の新潟大学医学部)を卒業し、1929年に医学博士に。以降、新潟脳病院での勤務、東京での神経科医院の開業、静岡脳病院院長への就任等、精神科医としてのキャリアを重ねていった。

1936年、式場病院を創設(当時は国府台病院)、隆三郎38歳のときのこと。風光明媚な千葉県市川市国府台の地で、「暗いイメージの精神科に明るさを取り入れ、より文化的で和やかな空気が感じられるように」という式場の想いは、芸術の潤いがあふれる空間づくり、広大なバラ園の造営、近代的な病棟の建設などに結実し、それらは日本の精神医療界に大きな一石を投じることになった。われわれの知る有名な業績は裸の大將こと山下清を発見し、保護者兼プロデューサーとして売り出したことだろう。

式場は叔父・式場麻青の影響から文芸の世界に憧れ、早くから雑誌「ホトトギス」などを愛読し、医学生時代に白樺派に傾倒、1910年創刊の「白樺」にも強い関心を寄せていた。1920年初夏、当時我孫子に住んでいた柳宗悦を訪れている。これが式場と柳との最初の出会いだったのかもしれない。その後「白樺派」の作家たちや民芸運動にかかわる人々、バーナード・リーチなどと親交を持った。柳宗悦に対しては生涯にわたって「私の芸術に関する恩師」と仰いだばかりではなく、自分の娘さんの名づけ親にもなっている。文芸や芸術創造活動と人の精神的な問題とのかわりに関心を持った。精神科医としてはゴッホに関心を寄せその方面での著作も多い。

そもそも、式場と民藝との関係は古く、その誕生のきっかけとなった柳宗悦らの、木喰(もくじき)仏の調査にも参加しており、運動の最初期からの関わりと



言うことができる。しかしその表舞台で注目を集める華々しい活躍がそれほどなかった初期に比べ、昭和14年創刊の『月刊民藝』では、式場の貢献が一気に顕在化する。この雑誌は先行する『工藝』に対して、より親しみやすく普及につとめる媒体として創設された。

この大きな変化、すなわち式場が民藝運動に本格的に参入したのは、これから遡ること3年のこと。昭和11年に開館した日本民芸館に品物が「活々(いきいき)」と並ぶ光景に大きく心を揺さぶられ、自らの内に豊かな空想や創造力が生まれるのを実感し、この後式場は徐々に民藝との関係を深めた。

『月刊民藝』は昭和14年4月に創刊(昭和17年1月に『民藝』と改題)。昭和22年7月刊の第七十号をもって終わった。奥付には「編集者発行人」として浅野長量の名があるが、編集の中心となったのは式場である。昭和14年1月30日夜、初の沖繩旅行から帰京した柳宗悦に土産話を聴く宗悦邸での集いの席上、式場の熱心な提案があり、その場で創刊が決定された。浅野長量はその時同席した河井寛次郎が「まるで夜が明けたやうな気がする」とまで云はれて賛成されましたとも伝えている。創刊号の冒頭、「月刊民藝の由来」と題して、式場が、この雑誌の方向性について語っている。そこで彼は「良心的な編集によって継続される『工藝』に対し、「敏活を主とする軽機関銃のやうな役目を」を果たすものと位置付ける。また「新しい読者が新しい同志となつて民藝運動が強化するに違ひない」とそのビジョンを熱く語っており、啓蒙活動の実践者という側面が強い式場の特質をまさに体现するような媒体であった。

またこの『月刊民藝』の創刊について、式場自身は、自邸「榴散樓(りゅうさんろう)」の竣工が提案の契機となつたと書いている。「濱田兄の一方ならぬ御尽力で私の家も漸くできた。3月24日協会同人たちが琉球へ旅立つ大安日に引越をした。柳さんにも大変な面倒をかけた。外村、柳悦孝、芹沢の三兄にも厄介をかけた。河井老の助力も有難かつた。『たくみ』の後援も忘れられない。かうして民藝協会の人々の協力でできた

ので、私の家であつて私の家でないやうな気もする。みんな使つて貰ひたい。私が『月刊民藝』を出す決心をしたのも、落成を記念して民藝運動に力をいれようと思つたからである」

式場隆三郎「榴散樓の記」によれば「最初の図を描いた宗悦には、「初めから書斎に重点を置いて設計して貰つた」という。これまでの家は「書斎になる部屋の『よしあし』で決めていたのが不満だったのである。濱田は柳の原案を受け、「二十畳の書斎を二つに折つて、十二畳くらいを応接間にしてマントルピースと出窓に造り付けのソファアをつけ、八畳の方は床を二尺位高くしてかぎの手に曲げること」を提案した。書斎の床下は半地下室となつたが、そこに河井寛次郎のアイディアで、「書斎の大机の足の下と回転椅子の下に格子をつくり、夏は地下室から風が入るよう」に工夫された。更に式場は壽岳文章にも相談、二階の寢室が第二の書斎を兼ね、その隣室が書庫とされた。他の民藝建築に比べ和室が少なくほぼ洋間で構成され、朝鮮張りの床、箱階段、洋風暖炉等東西の様式が融合する意匠が色濃くあらわれている。「榴散樓」の名前は、もともとと叔父・式場麻青が中学時代の式場に付けた名前(号)である。「今度の家を看護婦が本宅などと叫びだしかけてるので、それをやめさせたく思つていた」と式場は言つたという。式場の書斎には会津八一が揮毫した「榴散樓」の扁額が掛かっている。

昭和14年に竣工された自宅「榴散樓」は直後に見学会があり、座談会が開かれた。その際に壽岳文章は「民藝理論を最も高度に実現させた建物」と話し、「民藝見本家屋」との言も聞かれた。

ところでこの式場邸が昨年、国の登録有形文化財(建造物)に指定された。内容は以下のとおり。

- (1) 員数：1件1棟
- (2) 所在地：千葉県市川市国府台6丁目2412
- (3) 建築年代：昭和14年
- (4) 登録基準：「造形の規範となつているもの」

(5)概要:

市川市国府台に位置。二階建て切妻造り棧瓦葺きの主体部東西に平屋を接続。設計は柳宗悦、濱田庄司、現場監理は河井寛次郎で、東西の様式が融合する民藝の意匠が色濃く顕れた住宅。(写真は今回有形文化財に指定された建物と室内)

企画展 式場隆三郎と民藝運動

2022年4月30日(土) ~ 6月10日(金) 入館無料

開館時間 平日 10時 ~ 19時30分  
土日祝 10時 ~ 18時

\*入館は閉館の30分前迄  
休館日 月曜日・5月31日(火)・

会場 市川市文学ミュージアム・企画展示室



企画展  
民藝の父・柳宗悦から、山下清の師・式場隆三郎へと連綿した方  
「生きていれば心に触れる力が湧んでいる。」

式場隆三郎と民藝運動

2022年  
4月30日(土) ~ 6月10日(金) 入館無料  
開館時間 平日10時~19時30分、土日祝10時~18時  
※入館は閉館の30分前まで  
休館日 月曜日・5月31日(火)  
会場 市川市文学ミュージアム 企画展示室  
〒270-0201 千葉県市川市国府台6丁目2412  
TEL 0476-32-1111 FAX 0476-32-1112  
www.city-shikawa.chiba.jp/museum



(プロジェクト報告)

## 百人一首を楽しむ会(番外)

美崎 大洋

今月の歌恋の歌その13)

みかきもり 衛士のたく火の 夜はもえ

昼は消えつつ 物をこそ思へ (49)

## 【現代語訳】

宮中の御門を守る御垣守(みかきもり)である衛士(えじ)の燃やす篝火が、夜は燃えて昼は消えているように、私の心も夜は恋の炎に身を焦がし、昼は消えるように物思いにふけり、と恋情に悩んでいる。

## 【語句】

【御垣守(みかきもり)】宮中の諸門を警護する者のこと。【衛士(えじ)の焚く火の】「衛士(えじ)」は交替で諸国から招集される兵士のこと、ここでは御垣守を指している。衛門府に属して、夜は篝火を焚いて門を守る。「焚く火」とは、その篝火のこと。「御垣守 衛士の焚く火の」までが序詞になる。【夜は燃え 昼は消えつつ】「つ」は反復・継続を表す接続助詞。衛士の焚く篝火が、夜は燃えて昼は消える、という二つを対句として表現しており、同時に「夜は恋心に身を焦がし、昼は意気消沈して物思いにふける」という自分の心を重ねて表現している。【ものをこそ思へ】「ものを思ふ」は「恋をしても思いにふける」という意味で「思へ」は「思ふ」の已然形、「こそ」は係助詞で、「こそ…思へ」は強調の係り結び。

しのぶれど 色に出でにけり わが恋(こひ)は  
ものや思ふと 人の問ふまじ

## 【作者】

大中臣能宣(おおなかとみのよし)のぶ。921~961) 神祇大副頼基(しんぎのたいふ)よりものと息子で、百人一首にも歌がある伊勢大輔(いせのたいふ)の祖父。950年代に清原元輔、源順、紀時文(ときぶみ)、坂上望城(もちき)とともに「梨壺の五人」として活躍した。「梨壺の五人」とは、宮中の撰和歌所で万葉集の訓読や後撰集の撰定に当たった和歌の学者たち5人を

指す言葉。内裏後宮五舎のひとつで庭に梨の木のある「梨壺(昭陽舎)」に和歌所があったのでこう呼ばれた。た。

いにしへの奈良のみやこの八重桜

けふ九重に匂日ひぬるかな (61)伊勢大輔

## 関連狂歌

御かき守衛士のこく屁によし宣が

鼻かかへつものこそ思

み垣守衛士のたく火は夜は燃え

尻は冷えつつ物をこそ思へ

みかきもり火事のたく火の夜は燃えて

昼も燃へつつ物をこそ思へ

## 関連川柳

昼はうとうと眠つてゐる衛士と嫁

非番日はやたら寒がる御垣守

(恋の歌その14)

君がため惜しからざりしいのちさく長くもがなと思ひけるかな (50)

## 【現代語訳】

あなたのためなら、捨てても惜しくはないと思つていた命でさえ、逢瀬を遂げた今となつては、(あなたと逢うために)できるだけ長くありたいと思つようになりました。

激しい恋の情を表現した歌である。詞書には「女のもとより帰つてつかはしける」とある。恋しい女性のもとに逢瀬に出かけて一夜を過ごし、帰つた後に一首したためて贈つた歌で、こうした歌のことを「後朝(きぬぎぬ)の歌」という。

この歌とよく似た発想で作られた類想歌に紀友則の

命やは何ぞは露の あだものを

逢ふにしかば 惜しからなくに

という歌がある。「命がなんだ。命など露のようにはないもので、逢瀬できる」とことと交換できるなら、惜しくなんかない」という意味。

## 【語句】

【君がため】「あなたのため」という意味だが、ここでは「あなたと逢うために」、という気持ちを表している。【惜しからざりし】捨てても「惜しいとは思わなかつた」の意味。【ざりし】の「し」は過去の助動詞「き」の連体形で「思わなかつた」と過去の自分を思い描いている。【命さ(こ)さへ】は「までも」の意味で、添加の副助詞。「命までも」という意味になる。【長くもがな】「長くあつてほしい」という意味で、「もがな」は願望の終助詞。かつては恋のためなら命を捨ててもいいと思つていたこの身だけれども、願いがかなつた今はできるだけ命長らえ、あなたと長く逢いつづけていたい、という意味を含んでいる。【思ひけるかな】逢瀬を遂げた時から変わつてきた気持ちに、今はじめて気が付いたということを感じている。

## 【作者】

藤原義孝(ふじわらのよし)か。954~974) 謙徳公伊尹(けんたくこう)これた)の三男で、18歳で正五位下・右少将になつた。「末の世にもさるべき人や出でおはしましがたからむ(今後)もこのような人は現れないだろう」と言われるほどの美男で人柄も良かったが、痘瘡(天然痘)にかかつてわずか21歳の若さで死去した。美貌で知られただけに、痘瘡で顔に傷痕が残つて醜くなり自殺したとも言われている。怨霊になつたという伝説もある。

仏教への信仰心が篤かつた。義孝の信仰心を示す逸話として、以下のようなものがある。

・病気で危篤になつた際、一旦自らが息を引き取つても『法華経』を誦するためにしばらく生き長らえるので、通常通りの葬儀の作法で死者扱ひしないように母親に依頼した。

・賀縁(阿闍梨)や藤原実資は、義孝が極楽に往生している夢を見た。

・義孝は夜中に世尊寺の邸宅に戻ると、礼拝の言葉を発しながら、西の方を向いて何度も拝礼していた。

## 関連狂歌

めいいていにすするこのわた味よくて  
ながくもがなとおもひけるかな

「めいいてい」は酪酏、「このわた」は海鼠なまこ、この腸の塩漬け。

恋路には惜しからざりし命さへ  
長くもがなと地黄をぞのむ

注「地黄(じおう)・・・生薬。ゴマンハグサ科アカヤジオウの根を乾燥したもので糖類配糖体などを含む。血糖降下作用、補血、強壯、虚弱症、解熱などにすぐれた効果をあらわす。

関連川柳

君がため惜しからざりし指の先

注「誠心を示すため小指の先を切った女。」

君がため永くもがなと弓削たもち

注「弓削は道鏡。天平玉宇5年(913年)、平城宮改修のため都を一時近江国保良宮に移した際、病を患った孝謙上皇後の称徳天皇の傍に侍して看病して以来、その寵を受けることとなった。」

我孫子市文化財保存活用地域計画協議会

3月24日(木)、教育委員会大会議室において第2回標記の協議会が開催された。前回に続き5団体の5名が傍聴人として参加した。当日、傍聴席の机上には資料が用意されたが持ち出しは禁止とされた。「事務局報告」

- ・新たな資料の調査・整理はデータベース化された。
- ・新たな文化財の収蔵庫として布佐南小学校を確保した。新年度は旧湖北支所などの建造物2棟に耐震診断をした上で設置を検討。
- ・市内の文化財である志賀直哉邸の書斎の修繕について、市民の募金(クラウドファンディング)を募った結果、170%の募金が集まった。(予定は75万円)これにより庇、縁側、畳などを修理した。
- ・説明板・誘導板の設置については誘導板3基(鳥の博物館・水神山古墳・前原古墳)設置した。
- ・文化財への市民の関心と理解を高めるため、文化財マップを製作した。アビスタ、白樺文学館などで配布している。(下写真)

「委員からの質問など」

- ・市民活動団体の中には文化財の知識を有している人が多い。そのような地域の団体との連携も必要ではないか。
- ・計画案の達成度の表示が重要である。国からの認定で我孫子は周りからも注目されている。新しい公共設備をつくるのは難しいとの認識のようだが、補助金については十分な情報収集をやって頂きたい。
- ・市が未指定の文化財で貴重なものがある。市が関心を持つていて、日を日頃から住民に伝えた方がいい。仏像の盗難事件などもあることから防犯はその地域の住民と連携することも必要。

**地域住民の皆様へ**

我孫子遺産とは？  
我孫子市には地域の歴史をもつ文化財が数多く残っています。我孫子市では指定文化財を「我孫子遺産」として、保存・活用しながら次世代に継承していくことをしました。(このことは令和2年度に策定された「我孫子市文化財保存活用地域計画」で定めました。)

我孫子遺産のいま  
我孫子遺産は市内の各所に残っていますが、地元の方であってもその存在をあまり知らないことが珍しくありません。また、担い手の高齢化や自然災害により、次世代への継承が危ぶまれているものもあります。

我孫子遺産を守っていくために  
こうした我孫子遺産を守っていくためには、まず地域の皆さんにその存在を知っていただくことが大切だと考えます。  
・自治会を通じて我孫子の歴史や文化財の勉強会を開きたい  
・地域の文化財が災害や盗難などの被害に遭った/遭うことが心配といった場合には、ぜひ我孫子市教育委員会にご相談ください。我孫子の歴史と文化の未来のために、ご理解・ご協力をお願いします。

協賛・協力する団体  
我孫子市文化財保存活用地域計画 実行委員会  
我孫子市教育委員会 生活学習部 文化・スポーツ課 歴史文化財担当  
我孫子市市民会館(アビスタ) 少年館・康北分館・布佐分館)でも閲覧・貸出できます。

お問い合わせ先  
我孫子市文化財保存活用地域計画 事務局  
TEL: 04-7189-1583  
FAX: 04-7189-1760

ちばぎん総合研究所発行雑誌 『マネジメントスクエア』に 我孫子紹介記事

同誌の4月号最終頁に見開きで「ちば再発見 白樺派の文人たちが集った手賀沼の畔ー我孫子市」のタイトルで我孫子市を紹介している。

我孫子駅周辺の見学スポットを当会が案内したもののだが、文末は「・・・訪れた一日を通じ、何度も見え隠れする手賀沼が強く印象に残った。その畔に花開いた往年の文化の香りを、存分に味わうことのできた旅であった」と結んでいる。(右下は雑誌の一部)



当会植樹のヨウコウザクラが今年も開花  
3月下旬、市内のソメイヨシノの開花に先立ち、当会が植樹我孫子市経由したヨウコウザクラが沢山のピンク色の花を付け満開となった。幹はまだ太いとは言えないが、周囲にサクラの樹が少ないため美しさはひと際目立った。  
陽光桜(ヨウコウザクラ)は、「天城吉野(アマギヨシノ)」と「寒緋桜(カンヒザクラ)」との交配により生まれた、寒い地域でも暑い地域でも栽培可能な品種です。鮮やかな紅紫色で一重咲き、大輪の花を下向きに咲かせます。花付きが良く、大きく成長すると大変美しく見応えがあります。



**ちば再発見**

白樺派の文人たちが集った手賀沼の畔ー我孫子市

「我孫子の文化を守る会」と歩く

別荘の文化財保存施設が  
別荘の文化財保存施設が、令和2年度、且度町道沿いに整備された。この施設は、白樺派の文人たちが集った手賀沼の畔にあり、白樺派の文人たちの生活の痕跡を残している。施設内には、白樺派の文人たちの書斎や書庫があり、また、白樺派の文人たちの生活の痕跡を残している。施設内には、白樺派の文人たちの書斎や書庫があり、また、白樺派の文人たちの生活の痕跡を残している。

手賀沼の畔にコース  
手賀沼の畔には、白樺派の文人たちが集った。このコースは、白樺派の文人たちの生活の痕跡を残している。コース内には、白樺派の文人たちの書斎や書庫があり、また、白樺派の文人たちの生活の痕跡を残している。

第三十四回短歌の会(最終採択の一首) 三月二十二日実施

将門も黄泉で微笑む各街の  
史跡自慢は熱気を帯びて

村上 智雅子

給料が現金支給であったころ  
母は神棚に供え拝みき

納見 美恵子

雪降る日がばつときみ抱く勇氣なく  
いまもくち惜し手の小さきひと

佐々木 侑

よろこびの野菜を持ち来る友のいて  
早春の朝会話楽しむ

飯高 美和子

木立より鶯鳴くよ春の朝  
ここに住いて幸思う日々

芦崎 敬己

恋終り愛しき憎しみ既に消え  
ただ小銭入れ今に残れり

美崎 大洋

捨て難き夫の衣類を出し見れば  
微かに残る在りし日の香の

伊奈野 道子

西の空あかね一刷毛に染めあげて  
鳥もとばざり農業公園

大島 光子

戦争はなすべからずと思ひけり  
いかなる理由ありといへども

三谷 和夫

楚人冠「序跋詩歌集」より 杉村楚人冠  
俳句(昭和5年)夏

どこに行く児ぞ絵日傘のうしろかげ

譜をめくる指先に梅雨のしめりかな

魚籠に藻の干からびて江に風薫る

叛を謀る密議半ばを水鶏かな

六月の朝の日ざしや竹を伐る

日ざかりやたぐ一ひらのちぎれ雲

大徳の水飯をめす裸形かな

雲海や脚下におこる雷くづれ

海の上に日少しあたり雷遠し

当会の行事予定

□ 文化講演会と総会

日時 6月5日(日)  
講演会 14時~15時半  
総会 16時~16時45分  
場所 あびこ市民プラザホール

□ 「放談くわん」

日時 6月18日(土) 15時半~16時半  
会場 アビスタ第2会議室  
講師 村越邦雄氏(会員)

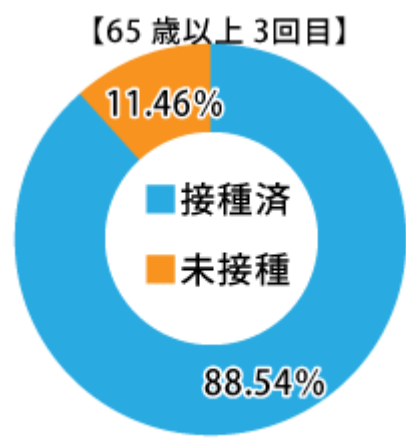
演題 手品の実演&トーク「昔の我孫子」

◎参加費、会員無料、非会員三〇〇円  
申し込みTEL七二八五〇六七五 佐々木まで

□ プロジェクト「短歌の会」  
第三十五回短歌の会  
日時 5月24(火) 13時30分  
場所 けやきプラザ10階小会議室

我孫子市 新型コロナワクチン接種状況  
3回目(令和4年4月26日時点の速報値)

年齢	対象者数	接種者数	率 (%)
18歳以上	121,538	76,656	63.07
65歳以上	41,814	37,021	88.54
18~64歳	79,724	30,635	49.72



編集後記 ロシア軍によるウクライナでの残虐行為に、太平洋戦争を経験した高齢者が怒りと悲しみを募らせている。無残に破壊された町並み、理不尽に被害された市民の遺体が放置されたウクライナの惨状に、あの時代の光景が重なるという。猛烈な爆撃の轟音に震えあがった防空壕での恐怖が蘇ったという知人もいる。ひとつの地球上で非当事国の人々は戦争の悲惨な状況をテレビで複雑な思いで観ているという現実。全くありきたりの言葉だが改めて「平和の有難さ、大切さ」を感じる。▲今回から白樺文学館学芸員稲村氏の白樺派、白樺文学館についての連載が始まった。以前から稲村氏には会報に何か書いて欲しいと思っていたが、やっと実現した。今後、我孫子と白樺派・民藝の繋がりの必然性が解き明かされることを期待したい。(美崎)